



受け継がれる 親子の絆・地域の絆 『愛の詩』集 発刊20周年



心の宿る場所

新井 皐月

金曜日の夜は心がおどる
フワフワ ソワソワ動きだし
足が心を持つてゐるみたい

春にお父さんが転勤になった
遠い遠い場所だから
これまでみたいに会えないね
でもさびしいなんて言わないよ
だれが一番さびしいか
言わなくていい わかるから

まちとおしいその夜に
エンジン音が近づいて
いつもより早く車のドアが開く
はさむお父さんのくつおとに
私の足も おどります

小さなステップふみながら
足はまっすぐ玄関へ

「ただいま」のその声に
ほほえむお父さんの口のはじ
会いたかったと書いてある

心は心だけにあるんじゃない
足にも手にも口にも宿るもの
少しやせた
お父さんの手を取って

「おかえりなさい」と返したら
ほら 私の口の両端も
会いたかったと語り出す

養老町発行

『家族の絆 愛の詩』十一集より

考えが表情や態度に

この詩は、町が令和元年度に募集した「家族の絆 愛の詩」の【小中学生の部】で、最優秀賞を受賞した、町内小学五年生新井皐月さんの作品です。この作品から、遠く離れて暮らしていても心がつながっていることや、大好きなお父さんが帰宅す

る日が待ち遠しくて、体中のあちこちに心があふれ出ていることが伝わってきます。日本のことわざや慣用語には、心の状態や気持ちを、体の部位を使って表すものがありますが、まさにこの作品には、「会いたい」という気持ちが、手にも、足にも、目にも、口にもあふれています。そして、それは、「わたし」だけではなく、「お父さん」も一緒にあることや、作品には登場してこないけれど、きっと家族全員が同じ気持ちであるだろうということが想像されます。

「目は口ほどに物を言う」ということわざがありますが、人の感情は、表情や態度・言葉遣いなどに自然に出てくるものです。もの見方や考え方といった内面を、大切にしていきたいと思っていました。

絆づくり

親子で取り交わされているこのような挨拶以外にも、子どもは、普段の何気ない親の姿や会話から多くのことを学びます。食卓に並ぶ毎日の温かい食事、洗濯された服、玄関にそろえられた靴など、親がわが子のため

にするすべてのことからその慈愛を感じ取って成長していきます。だからこそ、親が心ない言動をすれば、子どももまねをし、心優しい言動をすればそれをまねて育ちます。

そして、人の心の痛みを感じ取ることができる心や、心優しい気遣いができる姿は、親から子へ、子から孫へと受け継がれていきます。また、地域の人々の温かい言葉かけの姿も、地域の子どもたちへと受け継がれていきます。

それが親子の絆となり、地域の絆となっていきます。

『愛の詩集を通して 受け継がれる絆

町が平成二十二年に『愛の詩』集を発刊してから、今年でちょうど二十年が経過し、応募総数が四万点を超えました。家族（祖父母・親・兄弟姉妹・ご先祖）への感謝や愛情に満ちあふれていて、心が熱くなります。この温かい気持ちが、次の世代へも引き継がれ、養老町から全国へ一層広がっていくことを願っています。